



結果は運、挑戦は意思

今日から3月、この塾では新年度の開始です。高校入試が一本化され2月下旬になったことや、国立大の一般入試もこの時期に重なることで本当にあわただしく2月が過ぎてしまいました。J・COMの番組で教室長が解説したように、社会の変化を受けて大学入試が変わり、それを意識して高校入試の問題も長文の質問をしっかりと読んでその場で考えなければならないように変わってきました。

さて陸上400メートルハードルの日本記録保持者で世界でも活躍され、今は指導者およびコメンテーターをされている為末大さんが5年ほど前に書かれた記事があります。要約すると「引退してメディア側に立つと日本選手のインタビューの特異さを感じる。成績が悪かった他国選手が自分なりの敗戦理由と次の目標を語るのに対し、日本選手は期待に応えられずに申し訳ないと謝罪し続ける。これはメディアの無言の圧力により社会から反感を買いたくないという意識が働くからだろう。選手に謝罪を要求することの弊害が2つあり、一つは勝ち負けを超えて世界の頂点の舞台で感じたことや何をトライしたのかを聞ける貴重な機会を失うこと。もう一つは挑戦心がなくなってしまうこと。選手たちの挑戦の部分を評価しないで最後の結果だけで批判することは、大きく見ると子どもたちや社会が挑戦することにフタをしてしまうことにつながる。結果は運だが、挑戦は意思である。挑戦できる人たちが自分らしく挑戦をしていかないと生産性も高まらず社会は衰退する。」この記事がそのまま北京オリンピックについて書かれたものとも思えてしまいます。

今回の公立高校入試では、出願した高校よりもさらに倍率が高いもともとの第1志望校に挑戦するために志願変更した人がいました。ちょっと珍しい例なのですが、入試を終えて帰ってきた時には「やりきった！」というすがすがしい表情をしていました。結果がどう出るかはわかりません。しかし入試直前まで粘りに粘って受験勉強を続けたことで自信を持ち、それがチャレンジする意思につながったことは間違いのないでしょう。